

タンチョウ博士のお話（第10回）

今回は昔のタンチョウの数と減った時期や理由についての質問です。
質問は、〔中小〕遠藤健信さん、高橋諒多さん、三嶋瞳さん、〔北小〕鳥井俊輔さん、
〔西小〕近藤悠さん、〔長高〕松浦さんなど22名の方からいただきました。

〇風前のともしび

江戸時代に、タンチョウが北海道に何羽いたか、誰も知らない。正確に知っているのは神様だけ！
もし知っているというヒトがいたとしても、とても信用できない。でも、ある程度の推測（想像）なら、
ぼくもできるよ。

むかし、北海道にぼくの仲間がどれほどいたかに答えるのは、すごく難しい。でも、おおざっぱなことは言える。つまり、たくさんいたか、少ししかいなかったか、どちらか選べといわれたら、「たくさん」を選ぶよ。「たくさん」を選んだ理由はこうだ。江戸時代（17世紀）から明治の初め（19世紀後半）まで、ぼくたちのことを書いた記録が北海道にいくつもある。しかも、いたるところにだ。「昼間にぼくたちを捕ろうとしたが、たくさんいてこわいので、夜寝ているのを捕まえた」などという話もあるくらいだ。

だけど、どれくらい「たくさん」なのか、はっきりしない。では、数字を出そう。北海道には、100年ほど前に1,800平方キロ（1平方キロは1,000m×1,000m）くらいの湿地があった。

ここで、みんなに計算問題をひとつ。ぼくたちの1組の夫婦にとって、子育てに必要な「なわばり」の広さを仮に4平方キロとすると、この湿地で何羽が子育てできるか？

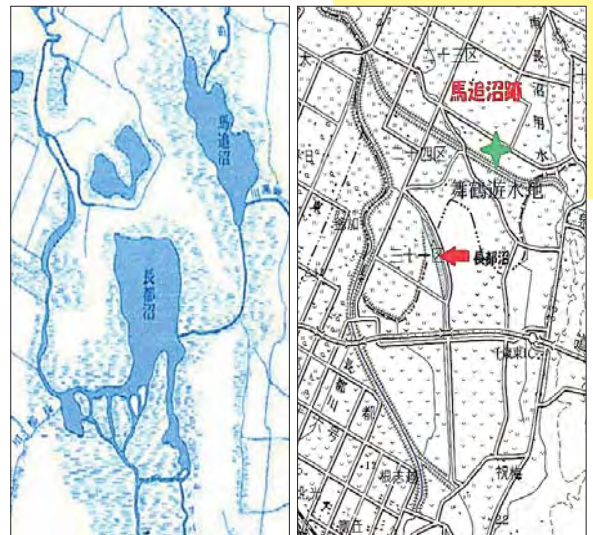
そう、900羽だね（450羽じゃない。1組の夫婦は2羽だよ）。もちろん、ぼくたちがすべての湿地で子育てしたわけではないけど、ほかに子供たちもいたから、みんなで1,000羽は超えていただろう。

しかし、夫婦が産む卵は年に2つ。卵の中で死ぬのや、生まれても、けが・病気・天敵などにやられて、1歳まで育つのは450組の夫婦から全部で170羽。このうち子育てできるまで生き残るのが120羽ほど。

ところで、ぼくたちの群れの中で、生まれる数（A）より、死ぬか・殺される数（B）が少なければ、年とともに仲間は増える。AとBが同じなら、数も毎年同じ。AよりBが多いと、仲間はだんだん減っていく。

さて、17世紀ころから、病気などで死ぬ仲間のほかに、ヒトはぼくたちを毎年たくさん（たぶん100羽以上）捕り、食べたり、ペットとして飼ったりした。さらに、幕末の混乱期には、ぼくたちを保護するきまりもなくなり、どんどん捕られたうえ、開発により湿地は水田に変わり、子育てする場所もぐんと少なくなった。

つまり、ぼくたちはAよりBがずっと多くなり、絶滅へむかうしかなかったんだ。



1909年

2005年

100年くらい前は、大きな沼と広い湿地だった舞鶴遊水地付近。ここにたくさんツルの住んでいた。

昔、街角でよく見かけた紙芝居屋さんの終わりの口上ふうに言うと、「ああー！ 風前の灯火（風がちょっと吹けばすぐ消えるローソクの火のようなもの）になった、ぼくたちの運命や如何に！」（文：正富宏之）